

## 看護学および社会福祉学領域における コーパス言語学的アプローチの基礎研究

関根紳太郎\* 岡部真子\*\* 小林由夏\*\* 佐々木彩佳\*\*  
角田八千代\*\* 橋口伸之介\*\*\* 水野正義\*\*\*

**要旨** 本稿は、岡山県立大学大学院前期課程の専攻共通科目である「国際コミュニケーション特論」で取り上げたコーパス言語学と内容分析を用いて、履修者が共同執筆者として各自の研究テーマの一端を解明するものである。本稿では、分析対象として共通の看護社会福祉領域コーパスを作成し、それを基に分析対象語を抽出した。そして、分析対象語を含む言葉の意味的まとまり（ディスコースおよびディスコース・セグメント）に対して内容分析を試みた。本稿は、複数の執筆者によるオムニバスの論考であるため、考察結果も様々であるが、看護学および社会福祉学領域へのコーパス言語学的アプローチの推進のために、速報的・記録的にまとめた研究プロポーザルの要素を含むものである。

**キーワード**：コーパス言語学、内容分析、看護、社会福祉、国際コミュニケーション

### 1. はじめに

まず、看護学および社会福祉学領域とコーパス言語学との親和性について考えてみたい。例えば、一般的なカメラがフレーム内に収まる「現実世界」を幾何学的に近似した<世界>として再現することを可能にしているのに対し、ヒトが捉える「現実世界」の心的表象を言語で切り出し、再現するいわば「現実世界」の虚構とも言えるメディア上の<世界>とでは、その言語的再現性という点に関しては正確さに欠けると言える。つまり、物理的実体や社会的事象が織り成すまさに森羅万象の「現実世界」と、それらに対する受容的解釈行為から形成される心的表象と、そこから発展的且つ相互作用的な能動的産出行為の結果として言語によって再現する<世界>との間には、受け手や読み手の経験値などに起因する知覚・認知上のズレや歪みが散在している。確かに、言語や映像等のメディアを駆使して「現実世界」(の一端)を“ソレ”らしいものとして近似的に扱うことは可能であるが、“ソレ”をまさに“ソレ”として言語的に再現することはほぼ不可能と考えられ、何らかのズレや歪み、時に偏向的な“特定の読

み”が与えられることがある。

同様に、看護学および社会福祉学領域で扱う「現実世界」とメディア（主に言語）によって再現される<世界>との間においても、ズレや歪み、特定の読みが介在していると言える。本稿では、そうした看護学と社会福祉学領域での「現実世界」とメディア上で言語的に再現される<世界>とのズレや歪み、とりわけ特定の読みに関して、コーパス言語学的手法と内容分析を取り入れながら、分析考察をすすめていくことにする。実際、言葉のデータベースと言えるコーパスは、多種多様なヒトが言語的に再現している<世界>の集積と捉えられ、ヒトの<世界>の捉え方を観察可能な状態にしたものと言える。また、それを基に統計的に抽出された語は、<世界>の一端を担う特徴的な構成要素であり、コーパスに内在する物理的実体や社会的事象を投影するものと考えられる。

本稿は、岡山県立大学大学院博士前期課程の専攻共通科目である「国際コミュニケーション特論」で取り上げた内容を基に、その研究成果の一環として履修学生が各自の研究テーマに関連する研究キー

\* 岡山県立大学保健福祉学部

\*\* 岡山県立大学大学院保健福祉学研究科看護学専攻

\*\*\* 岡山県立大学大学院保健福祉学研究科保健福祉学専攻

ワードを分析対象として、看護学および社会福祉学領域という括りの中で英語圏メディアにより再現される（「現実世界」と近似的な）〈世界〉を評価したものである。本稿では、“評価”を「研究対象を分析、検証し、そこで用いられる言語の意味的特性や言語から醸成されるコンテキストや言外の意味、いわゆる“含み”を解明することであり、〈世界〉に内在する特定の読みを顕在化すること」と定義する。こうした評価を実践することで、各履修学生が、主たるテキストである言語やコンテキストの主成分と言える「(異)文化(的意味付け)」に対する意識の高まりを含めた「メタ言語力」や「メタコミュニケーション力」を養い、より高みから研究対象となる〈世界〉を俯瞰し、翻って、言語や文化の要素を多分に包含する看護学および社会福祉学領域の「現実世界」と〈世界〉への意識が深化することを期待する。

なお、本稿の執筆にあたり、「国際コミュニケーション特論」の全履修学生6名が、研究の主旨を理解し、共通の研究手法を用いて、各自の学問的関心を研究ノータン的にまとめることを目指した。また、考察結果は様々であるが、科目担当責任者が投稿論文として一貫性のある内容構成および書式となるよう体裁を整えた。

## 2. 研究方法とコーパス分析

まず、分析対象となる看護社会福祉領域コーパスを作成する。コーパス作成にあたり、各執筆者の研究領域（看護学、幼児教育学・保育、社会福祉学）に関連するメディア上のテキストから採取する。<sup>1)</sup>次に、分析対象コーパスと参照コーパス<sup>2)</sup>を用いて、特徴語（keyness）を抽出する。抽出するにあたり、統計指標の1つである対数尤度比（G-score）を採用する。<sup>3)</sup>そして、抽出された特徴語と共起する語（以下、関連語とする）を包含する意味のある文のかたまり（ディスコース）もしくはその断片（ディスコース・セグメント）について内容分析を試みる。

こうしたコーパスを活用した量的分析は、研究者の恣意性をかなりの程度まで排除し、統計的有意性を根拠とした客観的妥当性を担保することを可能にしていると言える。

巻末の表が看護社会福祉領域コーパスの特徴語上位30語である。（紙面の制約上、上位30語を抽出

した。また、機能語である the や and 等は排除し、内容的に意味のある内容語のみを掲載した。）

## 3. 内容分析

2で抽出した特徴語を基に、6名の執筆者が各自の学問的関心により分析対象語を選出し、それらを内包するディスコースおよびディスコースセグメントについて内容分析をすすめる。

### 3-1. 岡部研究

近年、IT技術は著しい発達を遂げている。その中でも、ウェアラブルウォッチやスマートバンドなどの身体装着型のウェアラブルデバイスの市場規模は年々拡大している。特に、ウェアラブルウォッチは、歩数や消費カロリーだけでなく血圧、心拍、睡眠の質など様々な項目が測定可能となっている。このことから、自身の生体情報を24時間セルフモニタリングすることができ、健康管理の新しい方法の一つになりえると考えられている。そこで研究テーマとして、ウェアラブルデバイスを活用した介入を行うことで地域住民の健康意識は向上するののかという点について明らかにしていきたいと考えている。その研究の一端として、今回メディアを活用した量的分析としてコーパスを用い、質的考察として内容分析を取り入れ、国際的視座からエビデンスの一部分の抽出と評価を試みる。

#### 【量的分析】

本稿では、看護社会福祉領域コーパスにおいてコーパス言語学的に特徴が見られた health を中心語とし、それに共起する関連語として care を選択した。これら2語を分析対象として、英語文化圏の中で社会的にどのように使用されているのかを考察するとともに、その概念が医療・看護の〈世界〉でどう活用できるのか検討してみたい。

health care

中心語頻度	225
共起語頻度	169
共起頻度	33
コーパス語数	66190
■共起強度計量結果■	
共起頻度	33.000
Tスコア	5.645
相互情報量	5.844
対数尤度比	214.13

【内容分析】 \*下線とイタリック体は筆者、以下同じ。なお、Tスコアと相互情報量は石井（2004）を参照。

1) Mobile technology has become a ubiquitous part of everyday life and is changing the way we offer clinical care and perform clinical research.

[*The Future of Wearable Technologies and Remote Monitoring in Health Care. 2019*]

用例1) では、モバイル技術は日常生活の至る所にあり、私たちの臨床ケアと臨床研究の方法を変化させているという指摘がある。

2) We have unprecedented access to data for one's self-care as well as for sharing with health care providers. Meeting the challenge posed by the influx of wearable device data requires a multidisciplinary team of researchers, clinicians, software developers, information technologists and statisticians. Although the possibility of what can be achieved with the ever-evolving wearable technologies seems to be unlimited, regulatory agencies have provided a framework to establish standards for clinical applications, which will also affect research applications.

用例2) では、IT技術が自己のセルフケアデータを医療関係者<sup>4)</sup>と共有し活用できるという点に着眼している。また、ウェアラブル機器データの導入による課題解決には研究者や、臨床医、ソフトウェアの開発者、情報技術者や統計学者など、学際的な研究チームが必要であると述べている。

#### 【まとめと考察】

こうした用例から、内容分析の中で注目した、ubiquitousについて国語辞典で見ると、ubiquitousとは、「あらゆるものにコンピューターが内蔵され、いつでも、どこでもコンピューターの支援が得られるような世界や概念」を指すもので、インターネットなどの情報ネットワークに、場所や時間の制約なくアクセスできる環境が整えば、場所にとらわれない働き方や娯楽が実現できるようになるという概念であると記されている。また、一般にユビキタス・コンピューティングともいわれ、人がコンピューター機器を身につける方法を研

究するユビキタスの一分野にウェアラブル・コンピューターがある。英英辞典では、“seeming to be everywhere-sometimes used humorously”とある。このことから、ubiquitousは時や場所を超えてコンピューターに管理制御されているという概念であることが分かる。

次に身体にコンピューター機器を装着するユビキタスの一分野であるウェアラブルデバイスについて考えてみると、まず初めにウェアラブル(wearable)とは、「①身につけられるさま」「②着用できるさま」などがあり、英英辞書のwearableは、“computer that is designed to be worn as an item of clothing”とある。

このようにウェアラブルとは、常にコンピューターを身体に装着することができるという事を指している。先の内容分析にも示したように、ウェアラブルデバイスによってコンタクトレンズ装着時の目の状態をセルフモニタリングすることを可能とし、それによってドライアイ疾患の理解につなげることや、また、歩数や活動量以外の測定項目としては、心拍や血圧、睡眠の質など幅広い項目を測定し、バイタルサインをセルフモニタリングすることは、ヘルスケアをユビキタスの環境下で管理する一助になると言えよう。

一方で、ウェアラブル機器でのデータ管理は始まったばかりである。今後様々な職種との連携を通してウェアラブルのシステム開発は推進されていくと考えられる。その中で、看護職など医療関係者としてヘルスケアの視点からの利用法についても今後検討を深めていく必要があるだろう。

### 3-2. 小林研究

研究テーマは、高齢者のコミュニティ・エンパワメントに影響する要因について検討することであり、そのためには日本国内だけでなく、国際的な視点からみた地域社会資源<sup>5)</sup>を踏まえて考察することが重要であると考え。そこでメディアを活用した量的分析としてのコーパスと質的考察である内容分析を取り入れた。

#### 【量的分析】

本項では、看護社会福祉領域コーパスにおいて言語学的に特徴的であったsocialを中心語とし、それと共起する関連語のcapitalを分析対象として、それが英語文化圏でいかに社会的に使用されているか



を考察するとともに、その概念がエンパワーメントの研究においてどのように活用できるかを検討した

social capital

中心語頻度	246
共起語頻度	162
共起頻度	135
コーパス語数	66190
■共起強度計量結果■	
共起頻度	135.000
Tスコア	11.567
相互情報量	7.809
対数尤度比	1457.80

い。

【内容分析】

1) One of the major interests articulated by stakeholders is gaining an understanding why some communities adapt better to change than others, why some communities are able to do better with a given set of resources, and what influences shape community confidence in achieving goals. Stakeholders are especially keen to understand what role social capital may have in shaping these outcomes. If the links between social capital and community confidence and adaptability are shown to be sufficiently strong, then building social capital in communities is likely to become an increasing focus of policy.

[*Social Capital and Social Wellbeing (Discussion Paper) Commonwealth of Australia 2002* ]

オーストラリアの利害関係者（すなわち地方自治体、地域住民、地方企業団体等）によって明確にされた主要な関心事の1つは、あるコミュニティが他のコミュニティよりも変化に順応しやすい理由、あるコミュニティが与えられた一通りの資源によってよりうまくできる理由、そしてコミュニティが目標を達成するために何が影響を与えるのかを理解することである。利害関係者は、社会関係資本がこれらの結果を形成するうえでどのような役割を果たしているのかを理解することに特に熱心である。社会関係資本と地域社会の信頼と適合性との間の関連性が十分に強いことが示されている場合、地域社会に社会関係資本を構築することが政策において一層重視

されるようになる可能性が高いと筆者は指摘している。

2) The potential benefits of *social capital* can be seen by looking at social bonds. In the United Kingdom, for example, a government survey found that more people secure jobs through personal contacts than through advertisements. Such support can be even more important in countries where the rule of law is weak or where the state offers few social services: clans can fund the education of relatives and find them work, and look after orphans and the elderly. But bonds can hinder people, too. Almost by definition, tightly knit communities, such as some immigrant groups, have strong social bonds, with individuals relying heavily for support on relatives or people who share their ethnicity.

[*OECD Insights: Human Capital. What is social capital? OECD Submitted by WebminForTheIOM4d on October 28, 2009* ]

社会関係資本の潜在的な利益は、社会的絆を見ることによって見ることができる。たとえばイギリスでは、政府の調査によると、広告よりも個人的な連絡先を通じて仕事を確保する人が多いことが明らかとなった。このような社会的な結びつきや地域の支えは、法の支配が弱い国や社会サービスがほとんどない国ではさらに重要になる可能性があり、氏族が親戚の教育に資金を提供し、仕事を見つけ、孤児や高齢者の世話をすることができる。また、一般的には、一部の移民グループのような緊密に結びついたコミュニティは強い社会的絆を持っており、個人は親戚や民族を共有する人々への支援に強く依存している様子が窺える。

【まとめと考察】

このように、イギリスなどの法の支配が弱い国では、円滑な社会（や地域コミュニティ）のネットワークの構築（結束）とその効率性を高める資源として social capital を捉えており、政府と地域が丸となって social capital を社会（や地域コミュニティ）に導入し、稼働させようとする高い意識や活動が見られる。特に社会的弱者（高齢者や課題のある方）に対するそうした支援活動は、エンパワーメ

ントの促進のための潤滑油として機能していると言える。

エンパワーメントとは、国語辞典では、「①力をつけること」、「(特に女性が) 力をつけ、連帯して行動することによって自分たちの置かれた不利な状況を変えること」、「権限の委譲」、「(開発途上国などの) 自立促進」などの意味があり、また、英語辞書的には、  
“the act or action of empowering someone or something : the granting of the power, right, or authority to perform various acts or duties” や  
“the state of being empowered to do something : the power, right, or authority to do something” とある。さらに、動詞 empower は、“to give official authority or legal power to” や “to promote the self-actualization or influence of” となっており、「(法的な) 権利や権限を与え」たり、それらを行行使する「自立的活動を促し」たりするといったことが含意されている。

また、看護分野におけるエンパワーメントは「パワーレスな人々が自らの生活をコントロールする能力を獲得し、生活する組織、生活構造に影響を与えるプロセス」<sup>6)</sup> と定義され、患者が自らの問題を解決できるようにするために、患者に本来備わっている能力を引き出すよう働きかけることであるとも捉えられる。この点から、支援や環境の構築により、患者が本来の能力を引き出せるようになるその過程がエンパワーメントと考えられる。つまり、エンパワーメントという語に表象される(認知的)意味世界が成立するには、本来自己が有する能力を最大限に活かさない(社会的)環境にある人の、そうした環境からの脱却であり、本人とその支援者による抵抗とみなすことができよう。

### 3-3. 佐々木研究

近年の日本国内における社会構造の変化として、家族構成の変化や家庭と地域関係の希薄化などが挙げられる。今後ますます家族の在り方、地域関係が多様化していくことが予測され、その変化に伴い様々な社会現象に対応していくことも時には重要である。そこで今回は、研究テーマである地域住民と子育て家族との関わりについて、多文化的な背景をもつ英語文化圏の文献を通して検討する。メディアを活用した量的分析であるコーパスと、質的分析と

しての内容分析を行い、多文化的な視点で地域と子育て家族について考察したいと思う。

#### 【量的分析】

本項では、看護社会福祉領域コーパスにおいて言語学的に特徴的であった social を中心語、それと共起する関連語の capital を分析対象として、それが英語文化圏でいかに捉えられているかを考察するとともに、日本の近年の変化を踏まえた上で、子育て家族が周囲にある支援の認識に繋がる考え方について検討してみたい。

\*上掲の 3-2 小林研究の表を参照

#### 【内容分析】

1) Author Lyda Hanifan referred to social capital as “those tangible assets [that] count for most in the daily lives of people: namely goodwill, fellowship, sympathy, and social intercourse among the individuals and families who make up a social unit”.

That gives some sense of what’s meant by social capital, although today it would be hard to come up with a single definition that satisfied everyone. For the sake of simplicity, however, we can think of social capital as the links, shared values and understandings in society that enable individuals and groups to trust each other and so work together.

[OECD Insights: Human Capital. What is social capital? OECD, Submitted by WebminForTheIOMm4d on October 28, 2009]

ソーシャル・キャピタル(以下、SCとする)は「人々の日常生活の中で最も重要とされる有形資産: すなわち、社会的単位を構成する個人と家族の間の善意の心、交わり、共感、そして社会的交わり」と定義されている。SCが何を意味しているのかについて、今日ではすべての人を満足させる単一の定義を思いつくことは困難だが、ある程度の意味として、SCとは、個人とグループが互いに信頼し合い、協力することを可能にする、社会におけるつながり、共有された価値観および相互理解として考えることができると示されている。

2) The measurement of social capital can

potentially provide valuable insights into the social networks and links that individuals and communities have, and importantly how these networks and links can be utilised to contribute to positive outcomes for the individual and the community alike.

[*Social Capital and Social Wellbeing (Discussion Paper), Commonwealth of Australia 2002*]

SCの測定は、個人とコミュニティの持つソーシャルネットワークやつながりに価値ある見識をもたらすとされており、どのようにしてこれらのネットワークやつながりを個人とコミュニティ同様にプラスの成果として寄与するよう利用できるかが重要だと示唆されている。

【まとめと考察】

英語文化圏であるオーストラリアにおいて、社会で生じる様々な人を介した現象を、SCという概念で説明し、官民協働で社会の仕組みに取り入れようとしている。OECD<sup>7)</sup>(2001)の定義で説明すれば、SCとは、"networks, together with shared norms, values and understandings which facilitate cooperation within or among groups"とある。つまり、集団内部・集団間の協力を円滑にする共通の規範、価値観・理解をともなうネットワークと訳され、ネットワークがその根幹であると言える。英語文化圏の多くは、宗教的な背景から個人主義が主流である。個人主義とは広辞苑(第4版)では、「個人を立脚点とし、社会や集団も個人の集合と考え、それらの利益に優先させて個人の意義を認める態度」とあり、英語辞書においても“the belief that the rights and freedom of individual people are the most important rights in a society”と、同様な捉え方がされている。しかし、個人の概念は文化的な背景より異なっているため、SCの理解に際しては、宗教的な要素も加味する必要がある。<sup>8)</sup>

以上のことを踏まえると、英語文化圏におけるSCは、個人やその集まりであるコミュニティに価値ある見識をもたらし、また、個人、コミュニティが自らネットワークやつながり等を改善することができる可能性をもつものであると捉えられる。しかし日本においては、このようにSCの価値を共有し、相互理解へ繋げるという考え方は一般的ではない。各々の個人は地域の所有しているSCに対し異

なる価値観を持ち、それ故に資源に気づかないことや、無意識での限界設定が生じるのである。そのため、英語文化圏のように、SCを無限に広がる多様な種類の資源として捉え、個人そしてコミュニティの中で活用していくためには、価値観の共有や相互理解の機会が重要となってくると考えられる。地域の中で自分たちの持つ資源について、各自の意見を共有し様々な人の目線から考えることで、共通理解につながり、その地域のSCに関する価値観が共有される。これは特別な機会を設ける必要はなく、地域の会合など何らかの集まりにおいて、話題を提供すれば簡単に行うことができる。

このようにしてSCを通して相互理解を深めることにより、特別に地域外からの支援がなくとも、地域内の資源によりある程度の困難が解消されると考えられる。特に、子どもに関係した家族の役割や子育ての役割を考える中で、SCの考え方を取り入れることは、フォーマルな支援では支えきれない部分を人と人とのつながりを活用したインフォーマルな支援でまかなうことにつながるであろう。

3-4 角田研究

研究テーマは「乳児の睡眠」と睡眠が継続されやすい「寝床環境」である。「寝床環境」を整えるうえで、まず「乳児の睡眠」についてのより広い知見を得ることが重要であると考えた。そこで、コーパス分析を用いて、日本国内のみでなく英語文化圏での文献から国際的な知見を得たうえで、乳児の睡眠について質的考察を試みたいと思う。

【量的分析】

本項では、看護社会福祉領域コーパスにおいてコーパス言語学に特徴的であったinfantを中心語とし、それと共起する関連語のsleepを分析対象として、それが英語文化圏でいかに使用されているかを

infant sleep

中心語頻度	130
共起語頻度	236
共起頻度	23
コーパス語数	66190
■共起強度計量結果■	
共起頻度	23.000
Tスコア	4.699
相互情報量	5.633
対数尤度比	140.94



考察するとともに、睡眠という<世界>の中で「乳児 infant」と「睡眠 sleep」について検討したい。

#### 【内容分析】

1) several studies have identified increased cortisol levels during pregnancy and after delivery in depressed mothers, suggesting that the maternal hypothalamic pituitary adrenal axis in utero may impact infant sleep. This would serve to prime the stress response in infants and subsequently interfere with the initiation and maintenance of sleep. …… and whether those high-risk infants with the most disturbed sleep go on to develop early-onset depression. If so, it will be necessary to determine whether sleep in infancy is modifiable and to define the optimal conditions for entrainment of sleep to the nocturnal period. There is already evidence to indicate that education and behavior sleep interventions improve sleep in both mothers and infants. [Sleep, Vol. 32, No. 5, 2009]

用例1)において、うつ病の母親の妊娠中・産後におけるコルチゾール値の上昇を確認した研究より、母親の視床下部下垂体副腎系が乳児の睡眠に影響を与えている可能性がある」と指摘している。これは、乳児のストレス反応を促進させ、その後の睡眠の維持を妨げている要因になると述べている。乳児の睡眠行動に影響を与える多くの環境的社会的要因がある中、母親のうつ傾向が乳児の睡眠に影響を与えている可能性を示唆している。乳児の睡眠に影響を与えている他の要因、ハイリスクな睡眠障害がある乳児がうつ病の早期発症とも関連しているのかを明確にしていくには、より大規模な研究が必要であると述べている。近年では行動的教育的な睡眠介入により、母親と乳児双方の睡眠が改善されるというエビデンスがあるため、今後の研究により乳児期の睡眠障害は改善できるかどうか、また、夜間睡眠時の最適条件が何であるかを明らかにしていく必要があると明示している。

2) First-time mothers are at particular risk for poor sleep (Lee & Zaffke, 1999; Signal et al, 2007), possibly due to the challenges of learning and adjusting to a new role. Given the burden sleep

loss places on new parents, interventions to help them minimize the stress of sleep loss and assist them in coping with night-time infant care would be welcomed. ……The interventions are typically behavioral-educational, as hypnotic medications are not recommended for management of long-term sleep problems (i.e., those lasting more than 2 weeks), are not conducive to night-time infant care, and should be avoided if possible in breastfeeding mothers because of potential risk to the newborn (Wolfson & Lee, 2005). Given the demands of the postpartum period, easily implemented, behavioral-educational interventions are the appropriate approach for improving sleep among new parents.

Results for behavioral-educational interventions promoting maternal well-being by improving infant sleep are promising  
[Research in Nursing & Health, 2011 Feb; 34(1): 7-19. Published online 2010 Nov 17.]

用例2)では、新たな役割の獲得や変化に適応するため睡眠不足になるリスクが特に高い初産の母親に着目している。睡眠不足が親に与える負担を考えると、睡眠不足によるストレスを最小限にし、夜間の乳児のケアがスムーズに行えるように支援をしていく必要があるとも述べている。用例1)でも取り上げられたように介入は行動的教育的アプローチであり、睡眠薬の使用は2週間以上続く長期の睡眠問題には適さないと指摘している。また、睡眠薬の使用は、母乳育児の母親にとって新生児への潜在的なリスクを避けるために可能な限り避けた方がよいとの指摘もある。産後のニーズを考えた時、親の睡眠改善のために簡単に用いることができる行動的教育的介入は、乳児の睡眠を促進させ、結果的に母親の幸福感を促すことになると考察している。

#### 【まとめと考察】

英語圏において、親を含めた「乳児の睡眠」は行動教育的アプローチにより改善する可能性がある」と捉えていることがわかった。また、睡眠障害は親のうつ傾向などの健康状態（具体的にはうつ傾向の妊産婦のコルチゾール高値であること）と関連している可能性があるとの文献もあることから、心理的問題だけでなく身体的な側面からも分析していく必要性があると示唆されていた。

母子の睡眠を含めた健康状態は、相互に関連しており母親の睡眠状態は問題なくとも、乳児に睡眠障害がおこることにより、母親の睡眠不足が助長され、母親がうつ傾向に陥る可能性もある。いずれにしても、母子相互間で睡眠問題は同調しており、乳児の睡眠が母親の睡眠に大きく関連していることが言える。

また、親に行動的教育的アプローチをすることで乳児の睡眠が促進されるとの研究報告があり、乳児の睡眠改善における有益な示唆があった。具体的には騒音・光・温度・運動・食事及び睡眠のリズムなどの睡眠環境や寝床環境、日中の生活リズムを、必要に応じ改善することにより、乳児の睡眠が改善され、親の睡眠障害が最小限になり幸福度が増すことが考えられる。

これらの結果から、母子相互の睡眠が快適になるよう睡眠に関する行動教育的アプローチと身体的側面からのアプローチ、睡眠衛生環境（寝床環境含む）の整備の重要性が明らかになった。乳児の睡眠についての知見を今後も深めていき、今後の「乳児の寝床環境」の研究につなげていきたい。

### 3-5 橋口研究

研究テーマは、幼児にふさわしい園庭環境を検討することであり、そのためには日本国内だけでなく国際的なエビデンスを踏まえた考察も重要だと考える。そこで、今回メディアを活用した量的分析としてのコーパスと、質的考察としての内容分析を取り入れることで国際的視座からエビデンスの一端を抽出し、評価を試みる。

#### 【量的分析】

本項では、看護社会福祉領域コーパスにおいてコーパス言語学的に特徴的であった play を中心語とし、それと共起する関連語の outdoor を分析対象

#### outdoor play

中心語頻度	156
共起語頻度	16
共起頻度	13
コーパス語数	66190
■共起強度計量結果■	
共起頻度	13.000
Tスコア	3.595
相互情報量	8.429
対数尤度比	142.99

として、それが英語文化圏でいかに（社会的に）使用されているかを考察するとともに、その概念が幼児教育・保育の〈世界〉でどのように活用できるかについて検討してみたい。

#### 2. 【内容分析】

1) Outdoor play is significantly different from indoor play. The outdoor environment permits noise, movement, and greater freedom with raw materials, such as water, sand, dirt, and construction materials. When challenging playground equipment is available, outdoor play offers children the opportunity to increase physical activity, and thus develop muscle strength and coordination. Outdoor play time and school recess should be provided in all programs for children of all ages and abilities.

[play essential for all children Imagination Playground, 2019.05.19]

戸外遊びは室内遊びに対してははっきりと異なっている。屋外環境では、水や砂、汚れや圧縮された物質のような生の物質の使用によって、音や様々な動きそして、さらに自由奔放な動きを提供してくれる。興味をそそるような園庭設備が利用可能な場合、戸外遊びは子供たちに身体活動を増加させる機会を提供し、そしてそれにより筋力を発達させることができると指摘している。あらゆる年代と様々な身体能力をもった子どもたちに戸外遊びの時間が必要ということである。

2) Many play activities enable children to gain perspectives on the world and to practice culturally sensitive skills that will allow adequate functioning in the global world in which they live. Notable curriculum planning provides for this sensitivity and skill development through play.

[play essential for all children Imagination Playground, 2019.05.19]

沢山の遊びによって世界についての観点を得ることや文化的感受力の訓練をすることができ、子どもたちが生きるグローバルな世界に適応する能力を育むことが可能であろう。



## 【まとめと考察】

このように、英語文化圏では、筋力や筋収縮といった身体能力や文化的感受性の涵養ができる活動として、outdoor play を捉えている。Outdoor play は室内遊びとは異なって砂や水といった物質があることやそのような物質の使用が可能なことによって身体活動が促されると言われている。また、年齢や発達によらず全ての子どものために outdoor play の時間を設け、カリキュラムを適切かつ計画的に提供することが幼児教育・保育において求められていることがわかる。

Outdoor play で発達するとされている能力として、身体能力だけでなく感受性といった非認知的な能力が挙げられているが、OECD ではこういった能力を社会情動的スキルと呼んでいる。社会情動的スキルは、「個人のウェル・ビーイングや社会経済的進歩少なくとも一つの側面において影響を与え（生産性）、異議のある測定が可能であり（測定可能性）、環境の変化や投資により変化させることができる（可鍛性）個々の性質」と定義<sup>9)</sup>される。その価値が米国の経済学者 Heckman によって提唱<sup>10)</sup>されている。

以上のことから戸外遊びが幼児教育において重要な環境であることが読み取れる。園での戸外遊びの環境における育ちを保障するには、園庭環境の整備が大切なことは明白である。興味をそそるような園庭であることが身体活動の機会を促す。このことは、非認知能力の育ちに置き換えても同じだと考えられる。そこで、どのような園庭設備が子どもを惹きつけそこでの遊びによって、身体的または非認知能力的に何が育っているのかという視点から園庭環境を検討することも今後重要になるのではないかということが本研究のエビデンスの一端として抽出することができた。

## 3-6 水野研究

研究テーマは、英語文化圏において性的虐待を受けた経験のある母親が備えているリスクは、どのようなものが存在するのかを明らかにすることである。子どもの性的虐待被害の発生率は国際的に比較して低い一方で発生件数が年々増加しているわが国<sup>11)</sup>にとって、発生率が高い英語文化圏の知見を取り入れることは重要なことであると考えられる。

## 【量的分析】

本項では、看護社会福祉領域コーパスにおいてコーパス言語学的に特徴的であった abuse を中心語とし、それと共起する関連語の history を分析対象として、それらの語に投影される虐待の〈世界〉を

abuse history

中心語頻度	168
共起語頻度	105
共起頻度	26
コーパス語数	66190
■ 共起強度計量結果 ■	
共起頻度	26.000
T スコア	5.047
相互情報量	6.608
対数尤度比	197.81

考察するとともに、子ども虐待研究において、どのように活用できるのかについて検討していきたい。

## 【内容分析】

1) This raises the question of whether mothers with a history of sexual abuse may expose their children to high-risk situation, perhaps by allowing contact with male offending partners or other perpetrators outside the home. In speculating about this process, some have suggested that survivor mothers are emotionally distant and removed from their children and that these characteristics may increase their children vulnerability to sexual victimization of their own children.

[*Child Maltreatment, Vol. 8, No. 4 (November 2003), pp. 319-333*]

母親が性的虐待を経験していると、問題のある男性と関係を持ってしまう可能性があり、その異性関係が、母親の子どもをハイリスクな状況にさらすかもしれない。また、いくつかの文献では、性的虐待を経験した母親は自分の子どもから心理的、物理的に距離を置くことや、これらの特徴により、その母親の子どもが性的な被害にあいやすくなる可能性があることを示唆している。

2) Timmons-Mitchell, Chandler-Holtz, and Semple (1996) found that mothers with a history of CSA experienced significantly more symptoms

of post-traumatic stress disorder(PTSD) following discovery of their child abuse than did non-sexually-abused mothers. Similarly, using a Canadian and Aboriginal Canadian sample, Hiebert-Murphy (1998) reported that a history of CSA, in addition to a lack of social support and the use of avoidant coping strategies, was related to greater emotional distress following disclosure of a child sexual abuse. Deblinger, Stauffer, and Landsberg (1994) reported that mothers own sexual abuse history was associated with greater feelings of aloneness and personal distress in facing the news of their children abuse.

[*Child Maltreatment, Vol. 8, No. 4 (November 2003), pp. 319-333*]

用例 2) では、Timmons-Mitchell、Chandler-Holtz、および Semple (1996) は、性的虐待を受けていない母親よりも、性的虐待を受けたことがある母親は、子どもの虐待の発見後に有意により多くの PTSD の症状を経験したことを見出した。同様に、カナダ人および先住民族のカナダ人サンプルを使用して、Hiebert-Murphy (1998) は、社会的支援の欠如および意図的な回避の使用に加えて、幼少期の性的虐待経験の開示が大きな精神的苦痛と関連していたと報告した。Deblinger、Stauffer、および Landsberg (1994) は、母親自身の性的虐待の経験は、子どもの虐待のニュースに直面する際、より強い孤独感および個人的苦痛に関連していたと報告した。

#### 【まとめと考察】

以上のことから、英語文化圏では、性的虐待の被害を背景に持つ母親は、PTSD や精神的苦痛を引き起こすといったように、心理的な面で大きなリスクを伴っていると認識していることが明らかになった。また、そういった母親が子どもにリスク与える要因として、母親の異性関係をあげていたことも特徴的であった。

Widom および Klhts によると、女性の被虐待経験は、売春を行うことへの予見となり、特に性的虐待とネグレクトを受けた女性がその後の売春行動と大きく関連していたことを明らかにしている。<sup>12)</sup> 不特定の男性と関係を持つこととなる売春を行う傾向があることから、性的虐待を受けた女性は問題の

ある男性との関係を持ちやすくなる可能性がある。また、問題のある男性との接触は、女性の心理的要因だけでなく、そういった男性が周囲に存在しているところで生活しているといった、環境的要因とも関係していると考えられる。

母親が子どもに対して与えるリスクに関しては、他者からの被害を受けやすくなるだけでなく、発達にも影響を及ぼす。さらに、性的虐待だけでなく、子ども虐待を受けた経験のある母親は、連鎖してその後の親子関係にも引き継がれるというリスクを備えさせることがこれまでの研究でも明らかになっている。つまり、母親の子どもだけでなく、孫やひ孫にも影響する可能性がある。内容分析では、母親の子どもへのリスクについて言及されていたが、リスクが子孫にも連鎖していくことについても考える必要がある。

今回の分析によって、英語文化圏では、母親の被性的虐待経験は、母親自身とその子どもにもリスクが伴うという見方を持っていることがわかった。

#### 4. 総括

「国際コミュニケーション特論」の履修者である執筆者6名がコーパス言語学的アプローチをとり、各自の学問的関心と合致する特徴語を抽出し、内容分析を試みた。岡部研究は、看護学領域でありながら、工学的研究を取り入れており、ウェアラブルデバイス(着用型高度情報通信端末)の活用がヘルスプロモーション等のさらなる推進に有効であることを示している。小林研究と佐々木研究は、ソーシャルキャピタルを分析対象としたものであるが、小林は、社会的弱者に対する支援や環境の構築により、そうした人々が本来の能力を引き出せるようになる過程がエンパワーメントであると指摘するのに対し、佐々木は、ヒトの内面に影響を与える宗教的信念や価値観、また心的状態の変容をもたらす家族やコミュニティといった環境もソーシャルキャピタルの一端として取り上げていたのは興味深い。角田研究は、乳幼児と睡眠の関係性について、行動教育的視点と睡眠衛生環境(寝床環境含む)の整備の重要性を顕在化させた。橋口研究は、幼児教育・保育領域であり、outdoor play が身体能力や文化的感受性を涵養することを指摘するとともに、社会情動的スキルとの関連性についても触れている。最後に、水野研究は、性的虐待経験の影響に関する内容である

が、特に母親の性的虐待経験が心理的、環境的連鎖につながることを鮮明化している。

以上の通り、研究テーマや学問的関心はさまざまであるが、看護学、社会福祉学といった研究領域であっても、コーパス言語学という量的分析およびそこで抽出された特徴語に対する内容分析との親和性は少なからずあると判断できる考察結果であったと言えよう。

## 5. むすびにかえて

重複するが、本稿は大学院博士前期課程科目である「国際コミュニケーション特論」で取り上げたコーパス言語学と内容分析を用いて、各執筆者の研究テーマの一端を解明する試みである。複数の執筆者が、複数の研究テーマにより分析考察したという点において、オムニバスの論考とも言える。しかしながら、それゆえ、作成した分析対象コーパスの質に一定程度の揺れが認められることは否定できない。そうした質的な揺れは、コーパス言語学において、統計結果の精度に多少なりとも影響すると言えらる。この点は、本稿の考察結果には再考すべきことが多分に含まれていることを意味する。このあたり、今後の課題としたい。

それでも、看護と社会福祉、それぞれの「現実世界」と分析対象が描き出す<世界>との間に発生している特定の読み等を捉え、それらを顕在化する学問的姿勢は十分に意識できたと言えらる。今後もこうした試みをすすめていきたい。

## 註

- 1) 分析対象コーパス（看護社会福祉領域コーパス）では、多岐にわたるメディア上のテキスト（ニュース記事、論説、学術専門誌、大学修士論文等）から採取しているため、紙面の制約上、具体的な参照元については省略する。
- 2) 参照コーパスとして、FROWNおよびFLOBコーパスを使用した。それらは1990年代のアメリカ、イギリスそれぞれの出版物より採取された約100万語のコーパス（合計約200万語）であり、本稿では平均的な現代英語の参照用サンプルとして適当であると考えた。
- 3) 石川（2004, pp.15-16.）は、対数尤度比（Log-Likelihood score）に基づくことで、異なる母データサイズを持つ2つのコーパスの頻度を正し

く比較し、特徴性を抽出することが可能になるとしている。また、染谷（2010, p.71.）は、特徴度（keyness）とは、目標[分析対象]コーパスと参照コーパスにおける頻度差の顕著性の度合いを示す統計的な指標で、そのうち一定水準以上の特徴度を示す単語を目標[分析対象]コーパスにおける「キーワード」(特徴語)としており、対数尤度比は $\chi^2$ 統計量と比べて、①正規分布を前提としないのでよい、②稀な現象を過剰評価しない、③サンプルの量的な差が結果に影響しない、という利点があるため、現在では特徴度の算出には対数尤度比を使うのが一般的であるとも指摘している。

- 4) 医療関係者とは、医療法によって「医師、歯科医師、薬剤師、看護師その他の医療の担い手」と定義されている。
- 5) 地域社会資源とは、地域で暮らす人々のニーズを充足するために用いられる有形無形の資源であり、制度や機関、人材、資金、技術、知識、人と人との繋がりなどが含まれる。
- 6) Segal SP, Silverman C, Temkin T (1995) Measuring empowerment in client-run self-help agencies. *Community Mental Health Journal*, 31(3),215-227.
- 7) OECD[Organisation for Economic Co-operation and Development: 経済協力開発機構]とは、先進国間の自由な意見交換・情報交換を通じて、経済成長、貿易自由化、途上国支援に対する貢献等を目的として活動している国際的な組織。
- 8) 英語文化圏における個人は、絶対的な存在である神と各々がつながっているという共通点をもった存在であり、日本における捉え方と異なることに留意しなければならない。
- 9) OECD ベネッセ教育総合研究所（2015）
- 10) Heckman（2015）『幼児教育の経済学』
- 11) 「日本における性的児童虐待の近年の動向」、『厚生生の指標』64(4)、pp. 22-26.
- 12) *American Journal of Public Health*, Vol. 86, No.4 (November 1996), pp.1607-1622.

## 付記

本稿の執筆にあたり、貴重な励ましのお言葉をくださった高橋徹氏（本学保健福祉学部看護学科教授）には、執筆者一同、この場を借りて厚くお礼申し上げます。



参考文献

石川慎一郎.(2004)「司法英語ESP語彙表構築の試み：FROWNコーパスと米国司法文献コーパスの比較に基づく特徴語の抽出」『神戸大学国際コミュニケーションセンター論集』1, pp.13-27.

石川慎一郎 (2005)「コーパスに基づく批判的談話分析の試み」『言語文化学会論集』 pp.3-15.

関根紳太郎 (2013)「東日本大震災報道にみる対日イメージとその評価に関する研究」『*Media, English, and Communication*』 No.3. pp.13-30.日本メディア英語学会.

染谷泰正 (2013)「政治ディスコースのコーパス言語学的分析—米国大統領選テレビ討論に見られるキャンペーン戦略」『メディア英語研究への招待』金星堂. pp.130-151.

辻幸夫 (編) (2013)『認知言語学キーワード事典』研究社.

フェアクラフ, ノーマン (著). 日本メディア英語学会メディア英語談話分析研究分科会 (訳) (2012)『ディスコースを分析する—社会研究のためのテキスト分析』くろしお出版.

マケナリー, トニー・ハーディ, アンドリュー (著). 石川慎一郎 (訳) (2014)『概説コーパス言語学—手法・理論・実践』ひつじ書房.

使用ソフトウェア

コンコーダンサー : AntConc 3.2.4 [<http://www.antlab.sci.waseda.ac.jp/software.html>]

統計処理ソフト : 言語計量用自動計算シート V1 [[language.sakura.ne.jp/s/doc/tasd.xls](http://language.sakura.ne.jp/s/doc/tasd.xls)]

表 看護社会福祉領域コーパス・特徴語リスト上位 30 語

	frequency	keyness	keyword(s)		frequency	keyness	keyword(s)
1	408	1328.41	children	16	192	515.48	group
2	236	1207.59	sleep	17	169	514.71	care
3	184	1080.89	intervention	18	82	497.24	outcomes
4	176	1007.87	mothers	19	134	477.15	physical
5	168	870.18	abuse	20	110	461.32	pain
6	118	819.66	parenting	21	77	456.95	infants
7	238	807.61	child	22	81	448.83	nursing
8	225	783.12	health	23	84	424.74	participants
9	163	696.66	risk	24	156	424.5	play
10	130	686.41	infant	25	154	424.33	study
11	162	685.3	capital	26	61	424.14	postpartum
12	246	681.95	social	27	62	387.71	interventions
13	151	622.71	patients	28	138	384.1	data
14	99	565	maternal	29	110	361.76	sexual
15	90	542.04	survivors	30	99	331.72	activity

\*総語数 : 66190 語

## A Pilot Study of Corpus Linguistics Approach to Nursing and Social Welfare Studies

SHINTARO SEKINE\*, MAKO OKABE\*\*, YUKA KOBAYASHI\*\*  
SAYAKA SASAKI\*\*, SHINNOSUKE HASHIGUCHI\*\*\*, MASAYOSHI MIZUNO\*\*\*

*\*Faculty of Health and Welfare Science, Okayama Prefectural University*

*\*\*Graduate School of Health and Welfare Science (Nursing Science), Okayama Prefectural University*

*\*\*\*Graduate School of Health and Welfare Science (Health and Welfare Science), Okayama Prefectural University*

**Abstract :** This study employs the application of corpus linguistics and content analysis in nursing and social welfare studies. The two linguistic methods were dealt in a graduate-level class, Global Communication Study, and the registered students of the class pursued their own research themes using the two methods. Hence, this study is an accumulation of each student's research results. However, this paper has a significant meaning as a research proposal since linguistics is not yet a popular approach in nursing and social welfare studies. This paper shows an affinity, to some extent, between linguistics and nursing and social welfare studies and will have a positive impact on further research in the field of the two studies.

**Keywords :** Corpus Linguistics, Content Analysis, Nursing, Social Welfare, Global Communication